
魔道士

蓮希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔道士

【Nコード】

N8820D

【作者名】

蓮希

【あらすじ】

魔術試験 それは、人が魔道士になるために必要な試験だった。魔術試験で受からなければ、魔道士を名乗る事は禁止されて居て、またこの国の中心にあるフローン学園は、魔道士を目指すために入る学園であった。其処に通うエルは、自分と同じ、強力な魔力を持つ少女を見つけた。

01 森の大穴

思わず、座り込んでしまう。腰が、抜けた

目の前には、大穴。自分が開けた穴だった。辺りには、鳥も生物が何も居ないように感じる。実際には、逃げたのだが。

慌てて自分の両手を見つめるも、変わったところは無く、ただ目の前にある穴へと視線を移す。

この穴はきつと、私がやった。

自分の放った魔術。それは、森の真ん中に大きな穴を開けてしまった。

あの時、魔術を放ち、爆音が鳴り響いた。その音に、思わず目を閉じたら、この通りだ。

何だか分からないけれども、取り合えず自分の手を握って、開いてを繰り返す。

荒かった呼吸もだいぶ落ち着きを取り戻し立ち上がる。

まじまじと穴を見つめるけれども、やはり自分がやったようにしか思えなくて、

自分にこんな力があつたのかと思うことしか出来なかった。

恐い　初めて、感じたかもしれない。こんな感情。

この力は、自分の物。

そして、使いこなさなければ、いずれ、この力に押しつぶされてしまふのだろう。

嫌だ。そんなの嫌だと思った。自分には、魔道士になるという夢がある。

そして、魔道士になってこの国や、他の国を救いたい。

それが、夢だった。

その穴を気にしながら歩き出す。歩いて、歩いて、気付けば森から

出ていた。

その森に残ったのは、静寂のみ

「……………？秋炎の森に大穴……………？ そんな話、何処で聞いたんだ？」

パタンツと本を閉じると、エルは無愛想な顔で、話していたクラスメートに聞いた。

魔術試験が始まるまで後一ヶ月という時も無いのに、エルは随分と余裕な顔をしていた。

最も、彼にとつて魔術を扱うのは容易いことだったからこそ。

そのクラスメートは、エルが話しかけてきたのに驚いたのか、本から眼を離したことに驚いたのか、目を見開きながらもああと答えた。「朝、教師の奴等が言ってたんだよ。魔術で空けたようだが何とかで、悪戯だとしてもあんな大穴は滅多に無いってな」

その言葉にエルは少し戸惑った様子で、礼を告げれば、また本へと視線を移す。

エルは大の読書家だった。本をめくれば、もう目の前に居るクラスメートの存在など忘れているかのようでその様子に、今度はクラスメートが戸惑うも、どうも言えば他の奴等と、何かを話し教室から出て行った。

数分もすれば、何時の間にか、クラスにはエルだけになっていた。周りが静かなのに気付けば、エルは顔を上げる。其処には、誰も居なく首を傾げた。

てつきり、試験に向けての練習にでも行ったのかと思えば、次の授業は移動だったことに気付く。

「面倒、だな……………」

動くのが面倒だからこそ、此処でサボっても良いかと考えながら長く、紅い髪をかきあげる。

次の瞬間紅い髪とは正反対の蒼い目で窓から学園の外を歩く少女を

視界に捕らえた。

思わず、ガタガタツと音を立てて立ち上がる。微かに感じる強力な魔力。それは、視界の隅に捕らえた少女から感じた。

視界から消えてしまう少女を、慌てて追いかけようと持っていた本を閉じる。

そして、思わず窓から飛び降りていた。

ポスツと軽々とした音で着地すると、少女が歩いて行った方へと走って行った。

その様子を他の教室の窓からポカーンと見ていた数人。

クラスメートは彼がサボる事など普通だったからこそ、気にしなかったが、それ以外の人物は口をあぐりと開けるしかなかった。

同時刻

ぼんやりと窓から空を見つめる者が居た。

「あれ？リフェイルどうかしたの？」

隣に居た友達が、のんびりとした口調で聞いてくる。

その言葉に、またリフェイルものんびりとした口調で伝える。

「……最近、空が変なのよねえ」

その言葉に首を傾げる友達。

リフェイルはんー？と声を漏らして、大あくびをして、また空を見る。

「そういえば、もう魔術試験かあ。」

関係ない言葉を言いながら、また空を見る。

ヒュツと影が振ってきた。少々驚いたものの、リフェイルは下へと視線を移す。

其処には、紅い髪の青年。多分剣術部門で去年優勝した青年だ。

「リフェイル」グランヴェイル。外に何かあるのかね？」

先生がギロリツと自分を睨むのも特に気にせず、リフェイルは答える。

「何も無いわ。気にしないで授業でも続けてなさいよ、このツルツパゲ」

その瞬間に、光で反射して、先生の頭はキラッと光。

少女はとても、口が悪かった。

02 少女との出会い

エルは朝から不機嫌だった。

その理由が分からないクラスメートたちは、エルの周りの不機嫌才一ラにビビリ、近づかない。

エルの不機嫌の理由は　少女だった。

昨日、あの後を追いかけたものの、結局少女は見つからなかった。それどころか、先生に見つかって説教されるしついていない日だったのだろう。

昨日見た、少女は幻だったのだろうか。

自分と、同じ様に強力な魔力を持つ人物に現れて欲しくて、そう考えていたのだろうか。

言われて見ると、少女の向かった先は一本道だったが、追いつける筈の距離で追いつけなかったのだから、幻でも可笑しくない。

本を読むことさえも出来ずに、エルは考える。

そっと、エルの後ろに近づく影が一つ。

その影も、エルが珍しく本を読んでいないようで驚いていたが、またニコリツと微笑むと、そっと、彼の隣の椅子に腰掛けた。

その椅子の持ち主はどうか行った様で、エルを見つめる少年　レイルは、ニコニコとエルに話しかけた。

「エル」

彼が言うものの、エルは全く反応を示さなかった。それにちよつとむっとした顔をしつつも、もう一度、話しかけた。

「エルってば」

むっとしたように言うものの、結局彼の反応は無い。

今度は、エルの耳元に近づいて怒ったように言う

「エルフィール!!」

彼の本名を口にすれば驚いた様に、それはもの凄い速さでエルはコチラを向いた。そして、また驚く。

「れ、レイラシエル な、何時の間に……」

クラスのものも驚いた様にコチラを向いた。エルの驚いた声は珍しかったのだ。無口の部類に入る彼は、一日に一言喋れば良いようだったのに、大声で、驚いていたのだ。それは、驚くなという方が無理かもしれない。

そして、クラスのもの全員は、エルに話しかけた少年、レイルに視線を向けて、思わず心の中で拍手を送った。

「何時までも返事しないからだろ？ 僕も寂しくなっちゃっじゃん」
「全然そうは思えないな……」

「此処に入学してからいつつもつまらなそうにしてるし、僕と居るときにもあんまり笑わないから、心配なんだよ？ でも今日は微妙。本を放り出すほど真剣にも考えてるみたいだけどどしたの？」

レイルの言葉に話すか話さないか迷い……話さない方を選んだ。

次が移動なのを良いことに、教科書類などを手に持ち、レイルの隣を歩きさつさと教室を出て行ってしまう。

慌てて、レイルは追いかける。

「ちょ、エル！！どうしたのさ！！？」

「……………別に」

彼は、自分を心配していてくれる。純粹に。

それは、エルにとって暖かくなるような感情だったが、今のエルにとって、頭の中には、少女しか居ない。

顔を上げる。そして息を吐くとまた、歩き出す。

その瞬間に、視界の隅を、桜色の髪の少女が通った。

桜色の髪……それは、エルが昨日見た少女と同じ髪の色。

ぱつと振り向けば、居た筈の少女の姿は見えない。

おかしい 何かおかしい。

何故今横切った筈の少女の姿が見えない。

此処で、ようやくエルは気付いた。

あの時少女に会えなかったのは、彼女が魔術を使ったから。きつと、自分が少女を追いかけていることに気付いたから。

だからこそ、自分に姿が見えないように、魔術を使ったのだろう。
…自分の眼は、間違っていないかった。

授業が始まる合図が、鳴る。

チャイムの音が鳴り、全員が教室へと駆け込むのを見て、自分はふと、少女が消えた方向へと振り返る。

居る、気がする。

何処にいたかなんてわからなかったけれども

それでも、あの少女は自分の目の前に現れそう

自分以外に、強力な魔術の使い手が居るとしたらきつとあの少女だろうと

エルは信じて疑わなかった。

ずっと、仲間が欲しかった。

数年前、この学園に入る前までは、そんなのどうでも良かった。

そう、どうでも良かったのだ。

自分にはレイルが居て、他にも魔道士を目指す者が居た。

そして、学園に入る暫く前に、自分が持つ魔力に気付いた。

自分でも強いと感じてしまう魔力

それを、恐いと思った。

だからこそ、此処まで、自分は人を避けてきた。

ずっと、仲間であり、友達だったレイルにも近づかず。

この魔力を爆発させてしまう事が、とても恐かった。

何故、自分だけがこんなに強い魔力を持っている

それが、疑問で仕方が無かった日々。

ただ、仲間が欲しかっただけなのだろう。

自分と同じ、強い魔力を持つ仲間が、欲しかった。

それだけだった。

だからこそ、強い魔力を持つであろう少女を、自分は必死に探している。

長い廊下を右に曲がった時

少女は居た。

自分の姿を見つけると、少女は一瞬震えてから、そっと腰にあった小さなナイフを自分へと突き出した。

「も……て……」

小さく呟いた言葉は、自分には聞こえず思わず首を傾げる。

それをキツと睨んで、少女は自分へと向かってくる。

此処は学園、ましては廊下だ。何か争いを起こしてはいけない。

瞬間的にそう感じたエルは近くの窓を開け、飛び降りる。

予想していた通りに、少女も飛び降りてきた。

少女は、呪文を唱え始めた。

「永久の白 永久の黒 闇の剣、光の剣を……」

その言葉にエルは思わず驚く。

その呪文は、最強とも呼ばれている呪文の一つ。

この星には、呪文など幾つもある。

自分で作り出す者も居れば、本に載っている奴をそのまま使う者も居る。

エルにとっては両方だった。本に載っているものをオリジナルとして作り出し、更に強力な魔術を作る。

昔の魔術は、強いものが余り無い。

だからこそ、今の人間の想像力などで、魔術は強くなる。だが、一つだけ例外があった。

昔から星に伝わる魔術があった。

それは、とても強く、並の魔道士では使いこなせないもの。

それは全部で百に届くか届かないか。その魔術を使いこなせるもの

は殆ど居ない

本に載っていた話だ。ちゃんと、本にも呪文や何もかもが書かれていた。

それでも、使いこなせない。

そんな呪文の一つを、目の前の少女は使っているのだ。

本好きの彼には、それがどんな呪文であるか、そしてそれがどんな術であるかを正確に暗記していた。

今、少女が唱えている呪文は 光闇神という双剣を生み出すもの。神も、ましてや魔王ですらも、倒してしまうという双剣。

エルにとって、それは実際に見たものではないからどれほどの威力が分からないが。

エルも負けないように呪文を唱えた。

少女の呪文は難易度が高い故に長引いてしまう。

ならば、簡単な術で呪文を止めるべし……

「弾ける 光龍破」

パチンツという音と共に、光は少女の目の前で爆発する。

それと同時に、腰の剣を抜き走り、少女の首元に剣を持っていく。勝敗は明らかについていた。

少女は悔しそうに唇を噛む。

「い……」

「何だ？」

首を傾げて聞くと、キツと少女はエルを睨む。

「殺せば良い。私が母の元へといけるのなら、それもまた運命」
とても低い声と共に強い意志を瞳に込めてエルにいう。だけど、エルには、その言葉の意味が分からなかった。

暫くして、剣を引き腰に戻すと、何でという顔で、少女はエルを見る。

「して……どうして、私を殺さない」

少女の外見を持つ者は、少女とは思えない瞳で、エルを見る。

それは、安心とも、悲しみとも、何とも取れなかった。

強い意志を込めた瞳の意味を、エルは知る事は出来なかった。

「……………何かと、勘違いしてないか」

小さな吐息と共に出てきた言葉は、こんな言葉だった。

その言葉に、えと少女はエルを見る。

ハアッ……………と溜息を吐けば、少女は言葉を放った。

「違うの……………」

低い声は高くなり、少女らしい声で、少女の瞳は、少女らしいものに変わって、エルに問う。

それを見て、エルは呆れたような目で少女を見る。

「だって、昨日も追って…」

「お前の魔力が見て取れたからだ。だからこそ、追った。」

それを聞いて、しょぼんと少女は俯く。

「ごめんなさい……………」

少女の小さな謝罪は、自分の耳にしっかりと入ってきた。

それを聞いて、エルは小さな笑みを漏らした。

それは学園に入ってから以来の笑みだということにエルは知らない。

03 少女の為の戦い

少女は俯いたまま、何も言わなかった。

少女が何か言うのを待つように、エルは近くの木に腰掛け、目を閉じた。

何時でも良い その姿は、そう語っているように見えて
少女は嬉しく思った。

それから、暫くは俯いていたが、何かを決心したように、少女は顔を上げる。

そして、それが分かったかのようにエルは目を開けた。

少女はそっと、エルの目の前まで歩いてくれば、隣に腰掛けてきた。何か、言わなければいけない。

そう思つて、少女は口を開く。

「……マナ」

「…ん」

「マーシャ＝レス＝ルフィスウエナ。……だから、マナ」

その言葉に、エルは小さく息を吐いてから綺麗に微笑んだ。

その笑みに思わず、少女 マナは顔を赤くする。

此処まで綺麗な異性を見るのは、マナにとって初めてだった。

長く、紅い髪は美しく、鮮やかで、自分を見つめる目も優しい瞳をしていた。

そして、何より整った顔立ちが、マナの顔を赤くさせる原因だった。

そのマナの心も知らず、エルは赤いマナの額に手を置いた。

ますます赤くなったマナ。

その様子に、エルは首を傾げる。

「ん？…熱は、無い様だが……顔が真っ赤だぞ？マーシャ」

自分の名を呼ばれ、思わず座ったまま後ろに下がろうとしてしまい、後頭部をぶつけた。

思わず転がる。痛い、痛い

後頭部はこれほどまでに痛いのだ

と実感した。

これほど痛いとは思っていなかった。

その様子を見て、エルは目を見開いてから、爆笑した。

これほど笑ったのは久しぶりではないのか

そう思いながらも、笑いは止まらなくて

マナは、その様子に驚きながらも、一緒に笑った。

暫くして、エルの笑いも収まった頃、マナはエルに話しかけた。

「ねえ、貴方の名前は？」

ニコニコと微笑みながらいうマナに、先ほどとは全く違うなとも思
いながら口を開く。

「エルフィール」ブレイズ」

本名を口にすれば、その後エルで良いと、付け足した。

マナは頷いてから二、三度覚えるようにエルの名を口にする。

その後、また暫く沈黙が続いた。

何を話せば良いのか、マナには分からなくて、ただ座ったままで空
を見つめるだけで

エルは、自分の隣に居る少女が口を開くのを、ただ待つだけだった。
それから暫く沈黙が続く

それを破ったのは、マナでもエルでもなかった。

「あつれー？マナじゃん」

聞こえてきた、声。それは、マナにとって聞き覚えのあるもので、
空から、声の方へと視線を向ける。

自分も、マナの名を呼んだ者へと視線を移した。

ピクリツと、マナが震えた……気がした。

その者は、いかにも自分は怪しいですと主張していた。

黒尽くめの長いローブを着て、フードから見える黒い眼は、自分と、マナを捕らえていた。

この学園の者じゃない。

それはすぐに分かった。20代後半ぐらいの顔をした青年は、胸元に魔道士だと主張するバッチをつけていた。

この学園内に魔道士は居ない。

教授たちは、魔道士とは別格だ。つまり、コイツはこの学園の者じゃない。

思わず、腰の剣へと手を伸ばした。

そのマナを呼んだ青年は殺気を身に纏っていた。

「へえ…そっちの奴はあれか？彼氏か？良いねえ、青春だねえ、だけれどマナちゃんは俺たち『黒龍神』が、捕まえなきゃいけないんだ。…ま、」

そこで言葉を切って剣を抜く青年。

来る エルは小さく呪文を唱え始めた。

「君もマナちゃんを庇っちゃうようだしねえ、二人仲良く 地獄にでも天国にでも行くがいいさ！！」

それと同時に、彼の剣は鎌へと姿を変えた。

黒龍神 ここらでは有名な、『狩り屋』

金さえ積みめば、人の命だろうが魂だろうがなんだろうが、狩る。

何故、そんなのが此処に居る。

マナが、何かしたのだろうか

長い呪文を止める事無くマナへと振り返る。マナは、怯えた目をしていた。

信じて その目は、そう語っているようで

呪文が完成すると同時に、小さく声を漏らした。

「信じる」

そして、マナより先に自分へと斬りかかって来る青年に向かって、

魔術を放った。

「火龍弾！！」

自分の放った火が、龍へと姿を変えて青年へと攻撃をする。

それを見て、驚いた青年はバツと身を引き、攻撃をかわした。

ヒュウと口笛を吹くと、嬉しそうに、楽しそうに、自分に向かって話しかけてきた。

「中々やるねえ。火龍弾。威力 中 結構な腕の持ち主じゃないかあ。だけど、そのにじみ出る魔力から悟ると、中の術しか使えないと見たよ。」

その言葉に、ひっかかったと内心笑みを浮かべる。

レベルが高ければ高いほど、人の魔力の強さを知る事が出来る。

そして、レベルが高ければ高いほど、自分の魔力を隠せる。

そして、自分の隠した魔力に気付かずに、青年は勝手に自分の力量を測ったのだ。

マナはオロオロとして、自分達を見ている。そして決心したように腰のナイフに手を伸ばそうとしたが自分がそれを許す筈が無い。

「信じる」

勝手に口から出た言葉だった。

自分がこんなにも少女を気にするなんて思っていなかった。

それでも、目の前で襲われそうになっているマナを、見捨てる事なんて出来なかった。

恋とかいう感情では、無いと自分で分かる。

ただ、護りたいと思っただけだった。

自分の手が届く限りの、人を護ろうと決めた。

自分の力で

マナは、意味が分かったのかそつと手を引っ込める。

それを見て、小さく笑みを浮かべると、自分を襲おうとしている鎌を剣で受け止めた。

受け止められるとは思っていなかったのか、やけに嬉しそうに笑みを浮かべた。

「何だか本気だして良い相手と見た。これは楽しい戦闘になりそうだね。」

吾気に言う、青年をキツと睨むとおやおやと苦笑した。

「俺は、ジン。ま、偽名だけどさ、君は？」

そう簡単に名乗るな　それが、母の教えだった。

だけど、戦う相手に名を教えるのは、別に悪いことではないと、心のどこかで思っている。

名乗るという事は、全力でぶつかるという事だから。

そして、自分も名乗る

風に紛れて消えてしまいそうな、小さな声で、

「エル、エルフィール。」

その言葉と同時に、戦闘は再開された。

誰よりも強く、誰よりも優しく、手が届く限りの人で良いから、護りなさい。

護り、護られ、そうして人は強くなっていくのです

分かっています。分かっていますよ、母上

金属音が鳴り響く。

何度、こうしていたのだろうか。

自分が相手の鎌を受け止め、その隙に斬りかかる。それを受け止められ相手の攻撃

これが、繰り返されていた。

お互いに、呪文を唱えさせる隙を与えず、次々と斬りかかっていた。何時、終わるのだろうか、このままではずっと終わりそうにない戦

いを続けていた。

ジンは相手の力を甘く見ていたのか、先ほどまで楽しかった表情も少しつらそうだった。それでも、まだまだ体力はありそうでエルも余裕に見えた。実際にまだ余裕なのだが、剣より魔術を得意とする彼にとって、今の状況は余り良いとは思えなかった。

それでも、ジンについていけているのだから彼の剣術は相当強いと思われる。

その様子を隅で見ているマナは苦しそうに息を吐いた。

（関係ない、人を巻き込んでいる）

自分の行動は、確かにそれだった。

人を、巻き込みたくは無い。

なのに、巻き込んでしまっている。

此处で、自分が呪文でも何でも唱えられれば、すぐにジンをやっつけられる。

それでも、しないのはエルが信じろと言ったから。

だからこそ、自分は此处で見ているしかないのだ。

エル、エル

（無事で居て

）

それが、今の自分の願い。

それから、数分後

授業の終わりを告げる、チャイムが鳴った

04 自分の役目

チャームがなると同時に、エルは大きく後ろに飛んだ。

それを見てジンは不審に思ったのか、自分とは逆の方に飛んだ。剣を腰にしまうと、ジンが驚いてキツと自分を睨む。

その目は、何故剣をしまった？という疑問を抱いているようだが、其の後すぐに授業が終わった学校に、ざわめきが戻ってきたのを感じて、ジンは鎌を剣に戻し、しまった。

「…今、退くというならば此方は内密にしても良いぞ？」

此処には、魔術を使えるものなど幾らでも居る。

同時に、教師たちだって、中級、上級ギリギリぐらいの魔術だって使える。

誰かが、見ず知らずの魔道士と戦っている学園の生徒を見たら、普通教師やらなにやらに伝えるだろう。そうしたら、慌てて教師や野次馬が集まるに決まっている。

ジンがどれぐらいの魔術が使えるのか知らないが、大勢の魔道士志望に囲まれては、そう簡単に逃げられはしない。

それを、エルは利用した。

このままで居ればまだ、決着が着くのは遠い未来だろう。現にこれだけ打ち合っている両者とも全く息を乱していない。

なら、一度退いて貰えば良い。なら、この学園に居る限り、ジンは迂闊に此処に入れない。

最も、彼の狙いはマーシャらしいが。

ジンは自分の言いたい事が分かったのか、ハアツと軽く息を吐けば楽しそうに笑い。

「すっかり本来の目的忘れてたねえ。ま、今はマナちゃんより君の方が興味有るし、何より強そうだからね……え、エルスフィーナ、だっけ？」

「全く違う。」

思わず突っ込みを入れた自分にジンはぷつと笑う。

「ははっ、御免御免。ま、今の俺は君の方が興味あるしね、今回は退いとくよ。…暫くマナちゃんには手を出す気は無いよ？君と遊びたいしね…ま、この言葉を信じるかは君次第って事だね」

その言葉に、エルは警戒と、もしもの時の戦闘態勢を解いた。

そして、後ろの隅に居るマーシャへと、視線を移せば、ふうっと自分も息を吐いた。

「貴様に会いたくも無いが……」

「まあまあ気にしないで、っと。じゃー、エルフィーク」

そうして、呪文かなんかを唱えたのか、ジンの姿は一瞬で消えた。

それを見て、聞いた自分はまたしても息を吐く。

瞬間移動か、空間移動の術でも使ったのか……あれは、中級、上級の魔術の筈

って事は……

「ジン…貴様は随分と、腕が良いようだな……」

自分は厄介な奴に手を出したのかと、額に手を当てて溜息を吐いた。

あれだけ戦っていて、全く息を乱していない二人に、自分は驚いた。魔力はどちらが上なのか、自分にはイマイチ分からなかった。

二人とも、魔力を中級ほどに隠していたから。

「……強い」

思わず、呟いてしまった。

あれほど強い者を、見たことが無かった。

もしかして、もしかしくなくても、エルが、エルフィールが本気を出せば、私など勝ち目が無いのではないかと。

今まで、星に伝わる魔術を、使いこなそうと頑張ってきたけれどもそれでも、私は彼に勝てないのではないかと改めて、凄いと思った。

目の前に居る彼を、凄いと思った。

「マーシャ、無事か？」

声をかけられてから慌てて返事をすれば、フツと微笑むエルフィールが居た。

良かったと、エルは20センチ程下であろう自分の頭を撫でた。

思わず、目を閉じる。

こうして、頭を撫でてもらうなんて事、余り無かった。

だからこそ、目の前に居る彼に有難うと呟いた。

「…、礼を言うのは、此方だ。…信じてくれて、有難う……」

少し目を見開いてから、目を細めて、自分に言ってくれる。

暖かい、暖かい温もり。

それすらも、感じずに生きてきた自分にとって、とても嬉しい物だった。

巻き込んでしまったという罪悪感よりも、自分を守ってくれたという嬉しさが、心に残っていた。

「エルエルエルエルエルエルエルエルフィールウウ……!」

どたどたともの凄い効果音をつけて、エルの名を呼んで走ってくる少年に、マナはびくりと震える。

キツと目つきを悪くしたエルは、自分に向かって飛び込もうとしている少年　　レイルを、見てから、しゃがみこみレイルをかわした瞬間に鳩尾に蹴りを入れた

「ごふう……」

思わずその変をのた打ち回るレイルを、呆然とマナは見つめていた。

(え、あれ友達じゃないの……?)

密かにそんな思いを秘めて。

「何するんだよ……!? 思いつきり痛いんだけど!?!」

「そりゃ、痛いようにしたからな……」

呆れた顔で言うエルにがくりつとレイルは肩を落とした。

マナは、おろおろとした様にエルへと話かけた。

「……あ、あの……え、エルフィ……」

「あつれー? エルが女の子連れてる……」

レイルは視線をマナへと向けると、ニコニコと人懐っこい笑みを浮かべた。

それに、マナもニコリツと微笑む。

「僕、レイラシエル」レーシェイア。レイルで良いよ」

「あ…ま、マーシャ」レス「ルフィスウエナ」ま、マナで」

無事挨拶を果たした二人にハアツとエルは溜息を吐く。

このままでは話が進まないな…と。

同時刻

ジンの自室にて、上官に睨みこまれていた。

「何故、マーシャ」レス「ルフィスウエナを殺してこなかった？ジン」

「別に関係ないだろ？俺は、戦いを好む魔道士なんぞでね」

その言葉に、ハアツと、金色の髪をした女性は溜息を吐き、睨んだ。

「マーシャを殺してからでも、十分だった筈だ。……この任務に何

年就いていると思つて居るんだ貴様は…貴様が、マーシャの暗殺を引き受けたのだろう。ジェラス」ウエ…」

「俺の本名を口にするんじゃないぞ！」

言葉を遮りキツと睨みこんだジンにフツと、女性は笑みを浮かべる。

「ほう、上官に向かってその口…切り落とされたいか？」

それと同時に鈍い音がした。

慌てて避けたジンの片腕には切り傷。そして、女性の手には両手剣。うっとうしく声を漏らし、血が流れ出る腕を片腕でおさえる。

「兎に角、自分で引き受けた任務を溝に捨てる真似はしないでくれよ。…貴様は、黒龍神で、最も信頼されている狩り屋だから…」

そう言つて、女性は去つ行つた。

片腕を抑えながら、ふうつと息を吐く。

「癒しの水よ… 葉水」

傷を直そうと、呪文を口にする。

傷の治った腕を横目で見てから、片腕を離しそして、小さく呟いた。
「チッ……何が、狩り屋だよ。……マーシャを殺すっていうなら、それは俺がやる。やらなくちゃいけないんだよ」

マーシャ 仕事に依頼された名を殺すのは自分の役目

自分が、この国で生きていくには、必要な事だと、思っていたい。

「悪い………マーシャ」

自分のために、大切な彼女を殺さなくちゃいけないのに

どうして、自分は躊躇う。

彼女を殺すのが、自分の役目だと信じて疑わなかったあの日が、今となっては辛い。

そつと声を漏らす。

「……きだ……マ……ヤ」

かすれた声で呟けば、エルと戦った疲れが出たのか、精神的に疲れが出たのか分からなかったけれども、兎に角眠気が襲ってきた。

そして、壁に寄りかかれば、数分もしないうちに寝息が聞こえた。

05 魔術試験について

次の授業が始まるチャイムが鳴る。

それでも、三人はまだ裏庭に居た。

最も、一人は野次馬気分で其処に居るだけなのだが。

三人して、大きな木の根元へと歩み寄れば、ドサリツと倒れこむ。

「……あー、疲れた。」

感情がこもっているような、こもっていないような、そんな声で呟くエルの言葉を聞いて、ドキツとマナは硬直した。

「……………え……と」

何とかして、声を出そうとしているマナの様子が分かったのか、慌てたように、エルは呟いた。

「違う……疲れ、は……したが………お前のせいじゃない」

その言葉に妙にホツとしている自分が居るのに、マナには分かって少しだけ、顔を赤くする。

その様子を見て、レイルは沈黙する。

（僕が居ない間に何があつたんだ！？）

それは、今すぐ問いたかつた質問だった。

授業をサボるのは、いつもの事だった。

別に授業に出なくても、大丈夫だということは先生もクラスの者も知っている事実。

だからこそ、他の生徒のように鬼になつて授業に出るとも先生は言わない。

教室移動の時は面倒くさいと言って滅多に行かないし、普通に教室で授業の時も大半は寝ている。

それでも、中間テスト等では常に一位をキープしているエルは、他の生徒から見たらふざけるなというところだろうが、誰も言わなかった。

無論、彼に喧嘩売るこの中等部の生徒は居ないだろう。

剣術部門優勝者となったエルに敵う者は居ないと分かっているから。剣術と同時に彼は運動神経は抜群であり、剣術部門二位であるレイルでも全く構わない。

それどころか、息を乱させることすら出来なかった。

（彼の、それほど強くなる思いとは一体何なのだろう）

思いが、強ければ強くなれる。それが、母の言葉だ。そういった、目の前の友人の顔を今でも覚えている。

あの穏やかな顔は、まだ忘れられない。

この友が、あんなに穏やかな顔をする事なんてなかったから。それほど、彼は母を尊敬していたのだ。

「……レイル……レイラシエル」

慌てて顔を上げれば、其処には首を傾げた友人の姿。

レイルは悪いと言って微笑んだ。

エルは其の姿を見て、小さくそうかと答えれば、視線をマナへと変える。

マナはぼんやりと少し悲しそうな顔で、俯いていた。フウツと息を吐けば、そつとマナの頭を撫でてやる。

「……何故、黒龍神に狙われている？」

あの狩り屋に。……今のエルにとってマナは命を狙われているということしか分らない。

だからこそ、自分と会った時自分を睨んだのか。

二日間にわたって狙われたら黒龍神と間違われてもしようがないか。そう解釈したエルは未だに俯いているマナに首を傾げる。

「あの……」

「エルの馬鹿あああああああ！！！！」

ドスツと鈍い音がする。

エルは腹を押さえてうずくまり、同じくレイルは頭を押さえてうずくまっていた。

マナがはつと頭を上げるけれども、何があつたのか分からなく首を傾げていた。

「……れ、……レイ、ル……頭突きはないだろう……」

「だ、だってエルが女の子虐めるからだろ！？マナにだっていいた
くないことあるだろ！？」

「分かってる。……が、いえるなら言つて欲しかったただけだ」

「うゝ！ああいえばこういうなあ、この馬鹿！」

「なつ、誰が……馬鹿だ！？最後から数えて二番目の奴が」

「何！？万年一位だからつて調子に乗つてゐるんじゃない！」

「乗つてない。少なくとも何時も調子に乗つてゐるお前より」

「何だと！？」

「……………ぷっ」

言い合いをしていた二人を見てマナが噴出した。

思わず言い合いを止めてからマナの方を振り替える。

はははつと笑顔で笑うマナに、エルはふう……と優しげな笑みを浮か
べながら溜息を吐き

レイルも驚きながら笑った。

（エルの笑みなんて久々に見たな。……マナつて子は随分と凄い子
だ）

長いこと見れなかった友人の笑みを見れて、心が穏やかだった。

「……御免……ね。思わず、笑っちゃつて。……………エルがそんなふうに

言い合うなんて思つてなかったから……」

其の言葉に、エルは沈黙する。

（そういえば、ずっとレイルと言い合いなんかしていなかった……）
この、友人と笑う事なんて滅多に無かった。

ふと笑みがこぼれる。

「馬鹿だな、私は」

「……？」

零した言葉に、首を傾げる二人。

覚えておいて？エル。どれだけ強い力を持っていたとしても、
貴方は貴方だから。

恐れるな。その力はお前のもの。ただ、扱いこなさなくても良

い。…お前は、私たちの、大切な息子だよ
幼い頃、一度だけ話された言葉。父と母が、自分の頭を撫でながら、
穏やかな顔で笑っていた。

その意味は、当時分からなかったけれども
今、分かったんだ。

自分の、魔力の事は皆知って居たんだと。

自分は昔から何一つ変わっていないんじゃないかと考えてしまう。
私が、力を持ってもいなくても

レイルは、自分の友人で居てくれると、確信がもてた。

「な、何笑ってるんだよ？エル」

「……自分の馬鹿さ加減に腹がたつてな」

「怒ると笑うの？」

マナの言葉に、また微笑む。

そして頷いた。

「今は、笑えるんだ。……レイル、私達は……友人だよ、な？」

不安な様に聞く自分にレイルはきょとんとしてから、真面目な顔に
なつて

「何言ってるんだ？今更…エルは友人じゃない！僕の大事な親友だ
！！」

当たり前のように言う彼にふつと微笑んだ。

今日の授業が全て終わるまで、話していた彼等の近くには、飲み物
やら、おにぎりやらという飲食物があつた。

「…今日は、私はそろそろ戻る」

その言葉にん？とレイルとマナは振り返る。

「…………一応、魔術試験が近いからな。参考書を集めてくるつもり
だ」

あ、そつかとレイルは納得した顔をする。

マナは嘘！？と甲高く声を上げた。そして暫くパクパクと口を開け

閉めし始めた。

「魔術試験……て何時？」

「……何時って、二十四日後だ。」

その言葉にマナはあんぐりと口を開ける。

「……マナも出るの？」

レイルが首を傾げながら言うと、あ、うんと小さく肯定してから頭をおさえてしゃがみこんだ

「どうしようどうしようどうしようどうしよう」

うんうん唸るマナに思わず、自分も首を傾げる。

「………何もやってないのか？」

「だってえ……忘れてたんだもん。ずっと黒龍神に追いかけてきて……どうしよう。えっと、魔術試験って内容なんだっけ？」

……… 本当に知識は入っていないようだ。

レイルと顔を見合わせれば苦笑いをして、小さく息を吐く。

「魔術試験とは、世界中に散らばった魔道士約200名＋各国の学園教師が集まり、全世界の中央部の国とも呼べる面積のある街、グランヴェルで行われる。テストで魔道士に自分の知識、魔力などを知ってもらい、自分が魔道士になれるかどうか計ってもらうためにある。そのテスト内容だがまず基礎的知識テスト、アイテム調合テスト、そして、魔道士との実戦になる。」

私たちが住む国、レヴェイルからは、グランヴェルに着くまで約二日となる。

最も、私たちの国がグランヴェルに近いからこそ呑気に出来るわけ
で他の国の奴等は一ヶ月もかかる場合もあったりする。

「基礎的知識テストは、普通の紙テストを三十分間に一枚のペースで四枚やるよ。一枚百点で、合計点350点……ぐらいだったはず。
このテストは結構重要。だからこそ結構厳しいよ」

自分に続き、レイルも説明を始める。

そして、一拍置いてまた軽く咳払いをしてから、続きを話し始める。
「アイテム調合テストは、それほど重要では無い。ただ、魔道士と

なれば旅に出る者が多い。万が一に備えて、アイテムが調合できると役に立つという事が目的で三年前に追加されたテストだ。これについては、点数が低くても良い。」

参考書を暗記したかのようなエルの言葉にマナはふむふむと興味深そうにどこから出したのかメモ帖に書き始める。

「僕面倒くさいからパス」

…… なら最初から首突っ込むなよ

密かにそう思いながら息を吐くと、ジーツとこっちを見つめてくるマナの視線に答える。

「最後は魔道士との実戦だ。たとえ基礎的知識が高くても、アイテム調合が上手く出来てもこれで魔道士に認めてもらえなければ、魔道士になることは出来ない。」

真剣に言うエルにマナも表情を固くする

「この実戦で自分の全力を相手に教えなくちゃいけない。……魔道士が、駄目だと判断したら其処で終わりだ。全てのテストは終了となり、その者は来年に目指すようにと、言われおしまいだ。つまり、勝て。力だろうが、精神だろうが、兎に角勝とうとするんだ。負けると思っていればそこでこれまでの努力はなかった事になる。これが最終テストだ。……まあ基礎的知識が有る分、魔道士もその部分をプラスして考えてくれるからな。……兎に角負けるな。これを目標にしとけ」

「……エルも、……負けられない？」

首を傾げていうマナに、表情を変えれば、優しげなまなざしで言う。

「ああ。負けられない。……お前は違うのか？」

「……うん！わ、私……約束したから」

「……そうか」

そつと微笑むエルに少しだけ顔を赤くするマナ。

「でもさあ、エルなら剣士つてのもアリじゃないのか？」

レイルが首を傾げて言うのに、エルは少し唸る。

「どちらかというと魔道剣士の方が良いな。……兎に角魔道士は譲

れない」

この力を使いこなすためには。

「……どうしよう」

また呟きだすマナに二人して横目でマナを見つめる。

「………わ、私…… 実戦は兎も角、調合も基礎的知識もない。」

うろと俯くマナに二人は腕組をする。

「僕は基礎的知識は殆ど無いけど、調合と実戦なら何とかなるな……」

「………私は、全部出来るが」

その言葉にキラリツとマナの眼が煌く。

「エルって何処住み？」

「私は寮だが」

「レイルは？」

「実家」

気付けばエルに抱きついているマナが居た。

「………っ！な、エルずりい！！」

顔を少し赤く染めて良いなというような表情でエルとマナを見るレイルと

「………………っ」

何があつたのかというようにマナを見つめるエルと

「………」

ぎゅー……と抱きついているマナ。

そして、マナは言う。

「私に勉強＋調合＋その他もろもろ教えてください！！泊まり込みで！！」

05 魔術試験について（後書き）

…えっと、珍しく長かった。

06 笛の音色

「わー！！此処がエルの寮かぁ……さっぱりしてる！」

部屋に入った一言が、この言葉だった。

それを聞いて苦笑して、座布団を持ってきてテーブルの近くに持って行った。

すると、マナは礼を言ってチョコチョコと座布団の上に座った。

それを見れば、コポコポツと音を立ててお茶を淹れ始める。

「何か見ても良い？」

興味津々と辺りを見渡すマナに息を吐く。

「構わない。特に重要な物は持っていないからな。試験の参考書になるものはあちらの棚にある。」

そういえば、食器棚から湯のみを取り出す。

マナはあちこちを見始めた。

「……妹が、居れば……こんな感じなのだろうか」

マナを優しくに見つめ、湯飲みを運ぶ。

そっとテーブルに湯のみを置き、一つの本棚へと近づけば、四冊程抜き出した。

「これがアイテム調合用……なら、これは……」

パラリツ、パラリツと本を捲れば、耳に聞き慣れた音が聞こえた。

横笛の音。それは、自分の母親が吹いてくれたもので、とても懐かしく思う。

不意に、涙がこぼれそうになった。

母上の笛の音、私は大好きだ

ふふっ、有難う、エル。私も、エルが好きですよ

もう、あの人の音色は聞けない。

大好きだった母上の音色は……

「……エル？手を止めてるみたいだけど、そんなに気になる記事でもあったの？」

笛の音を止め、マナが此方にくるのが気配で分かる。

こんな姿、見られるものか。

目に溜まった涙を乱暴に腕で擦ってから、本を捲りだす。

「良いや……昔から読みなれている本だ。気になる記事等この本にはないだろう……マナ、お前は随分と笛が上手いな」

そう、彼女が吹いて居たのは、自分の笛。

何処から見つけ出したのかは知らんが、此処の部屋に有る限り、それは自分の笛。

「……うん、お兄様に教えてもらってたから……うん、気のせいだったみたい。私、一瞬エルが泣いてるのかと思った」

ああ、何て勘の良い少女なのだろう。

図星だったからこそ思わず俯いてしまう。

女性の前で、男は涙を見せるもんじゃないぞエル
ああ、もう何で最近はこのように親の事ばかりか思い出す。

……分かってる。分かってるよ父上。

「エルも吹ける？」

その言葉にくるりつと振り向けば、そっとマナの手にあった笛を取る。

「……上手くは、ないぞ……」

小さく呟けば笛に唇をあてる。

奏でられた音色にマナは目を細める。

「……綺麗な、音色……」

小さく呟いた、約数十秒後に、マナの意識は薄れていった。

「……勉強、出来なかったな。」

眠ってしまったマナを見て、ハアツと溜息を吐く。

笛を棚に置き、マナを横抱きにすると、器用に扉を開けて廊下から隣の部屋へと連れて行く。

『幾らなんでも泊り込みはないだろう』

『でも……早く覚えないと!!』

どうしても引かなかったマナに特別に用意してもらった。

この寮は学園の者しか使えないのだが、魔道士志望で此方にきたものは、魔術試験が始まる三ヶ月程前から、部屋が開いている限り部外者でも使える。

それをマナに聞かせたら、私の隣の部屋にする事で解決した。

『年頃の娘が、普通男のところに泊り込みとか言つか?』

レイルも苦笑していたな。

ベットに降ろせば、起きたらすぐに来るだろうなと苦笑して、その扉から出て行った。

その部屋に聞こえるのは寝息のみとなった。

その夜中、エルはふうつと息を吐くと、読み終えた本をテーブルに置き、ベットへと転がった。

「……………久しぶりだな」

こんなに人と話すのは。学園に入ってから以来かもしれない。

笛を吹くのも久しぶりだった。

思い返せば自然と笑みが浮かんでしまう。

「…寝るか……………っ」

一瞬だけ、目つきを鋭くする。

少し考える仕草をしてから電気を消して、布団入った。

それから数分後……

「フンツ……………コイツが、ジンと戦った奴か…随分と弱そうだな?」

手ごたえなくてつまらなそうだ。と呟きながら窓から侵入した影。

片手には小さな短剣。長い金色の髪を靡かせ、女はそつとエルに近づく。

キーンッ!

女がエルを殺そうと短剣を振り下ろすと同時に、エルは布団の中に忍ばせておいた短剣ではじく。

「なっ……」

女の表情が、驚愕で染まると同時に、エルは布団の中でこっそりと唱えておいた術名を口にした。

「燃えろ 火炎陣！！」

バチンッ

音と共に女の身体が転がる。

女が慌てて起き上がる頃には、首元に短剣があった。

「……………先ほどジン、と言ったな？」

「……………」

女はエルを睨むものの、暗いからこそ、相手の表情も自分の表情すらも分らない。

しかし、女の表情もその一瞬だけで、女はニヤリッと微笑むとばれないように懐を探り始めた。

それすらもエルには分からず、言葉が続ける。

「貴様は、何者だ…？」

探るようなエルの言葉にも女はにやけたままで、懐から探りだしたものを、握ると、エルに向かって呟く。

「そうだな……………ジンの上官だ！！」

女はひゅっと小さなナイフをエルの腹部にめがけて投げる。

「……っ！」

突然の事で避けきれず、鈍い音と共にエルの身体は倒れ伏す。

「かはっ……………」

小さく吐息を漏らせば、女の笑う声が耳に聞こえ。

思わず、舌打ちをしてしまう。ズキズキと痛む腹部を片手で抑える。手に生暖かい感覚。痛む腹部に表情を歪めた。

それと同時に、顔を上に向かされた。

「……………お前の魔力は、厄介だからな。マーシャを殺すのに……………」

それと同時にゆっくりと口元へと”何か”が持ってこられる。

液体の入った”何か”をエルの口に流し込んだ。

行き場の無くなった液体がエルの喉を通るのに時間はかからなかつ

た。

「こ……は……？」

これとは、エルはかすれた声で呟く。その言葉に、女は微笑みながらいった。

「すぐにわかるさ。」

そういえば、女は来たときと同じように窓から出て行った。

それから、数秒もしないうちに、エルは意識は薄れていった

06 笛の音色（後書き）

術の説明 1

光闇神 コウアンシン レベル 最上級 属性 光・闇

双剣を生み出す魔術。片方は光で、もう片方は闇で出来ている。
レベルが高い魔術であり、呪文が長い！

・光龍破 コウリュウハ レベル 小 属性 光

攻撃呪文。光の衝撃波を生み出す術。
魔力が高ければ高いほど、衝撃波を操る事ができる

・火龍弾 カリユウダン レベル 中 属性 火

攻撃呪文 火の衝撃波を生み出す術
一度に幾つもの衝撃波を生み出せることから、意外とエルのお気に入りに入ったりする。

・葉水 ヨウスイ レベル 小中 属性 水

回復呪文 傷を癒す術
使える範囲が広い分、完全に傷を癒せないのが傷

・火龍陣 カリユウジン レベル 中高 属性 火

攻撃呪文

広い範囲で火を扱う事が出来る。

…えっと、作者説明下手で御免なさい。

07 魔力が消えた？（前書き）

み、短い……

07 魔力が消えた？

「ちょっと！！エル、エルってば！！起きろ！！」
声が聞こえた。

聞き覚えのある声……レイルだ。

腹部に痛みを感じながらそっと目を開く。

其処には、心配そうにしているレイルが居た。

何故、此処に居る？と聞こうと思ったが、レイルには合鍵を渡してあつたんだと、思い出す。

昨日、マーシャの寮の手続きと共に、レイルに合鍵を作ってもらった。

それが、もう役に立つとは思っていなかったが

「良かったあ……エル、何があつた？」

安心したように息を吐いた後、真剣な表情をして、自分の腹部……怪我している場所へと目を移す。

「……襲われた」

「……は？何で……」

「知らん。……油断した……っ、な」

痛みで顔を歪めれば慌ててレイルが顔を覗き込む。

「起きれる？僕は回復術は使えないけど……自分で出来る？」

その言葉に小さく頷くと、レイルに支えてもらいながら起きる。

そつと腹部へと手をやり、呪文を唱える。

………？

「術が、出ない………？」

どんだけ魔力を込めても、魔術が出せない。

何故だと、自分の手を見つめるものの、異変はない。

……違う。

「魔力が……消えている？」

自分の中に、魔力を感じられない。

手を何度か握って、開いてを繰り返す。

魔力が無くなった…、昨日までは使っていた筈。なのに何故、使えない。

魔術が使えなくなった……？

「エル…？魔力が消えたってどういうこと…だよ、」

「分からない。ただ、昨日……何か、飲まされた気がする。」

あの金髪らしき女に、ナイフを投げられて、倒れた自分に、液体の入った、瓶を飲まされて。

それで　　？

魔力が、無くなった。

「薬…？もしかしたら、それが原因！？」

「傷に響くから大声だすな」

「あ、ああ……って違う！魔力が無くなったら、魔術が使えなくなるじゃない！！それじゃあ……それじゃ、？」

「落ち着け。……状況を、整理したい。……出て行ってくれる、か？後、マーシャには内密に」

自分の言葉を理解すれば、レイルはキュツと拳を握った。

「……後で、塗り薬持ってくるよ」

「……………すまない」

「フンッ、そういう時は有難うって言うんだよ！エルの馬鹿」

「そうだな。」

そう言って、悲しそうにレイルは出て行った。

そつと、息を吐く。

原因は、分かった。

あの薬。本に書いてあったが、魔力を消す薬があると書いてあった。きつと、それを飲まされたのだろう。

……………マーシャを、殺すためには、自分が邪魔だと判断された、ということか。

「……………」

あの女……………何故、マーシャを殺そうとする？

ジンの上官、とも言っていたな。

「……………今度、ジンに会いに行くか」

あの女は危険だが、ジンは危険ではない。

心のどこかで自分にそう訴えているのがわかる

ジンならば、きっと何か知っている筈だ。

だが、今は……

「このままでは、魔術試験に出られない。」

魔術試験には、出られない。

ならば、どうする？

絶対に、魔術試験に出なければいけないのに、出られないなんて。

魔術試験に出られなくなったら

私が、家から出てきた意味が、無くなってしまう。

私は、魔道士になれないと思うんだ。

んなこといつてんなって。あたしはなったよ？魔道士に。

辛い事も有るけど結構楽しいもんさ。

だけど、私には、そんな力が無いんだ

ふう…気付いてないってのは結構傷モンだな。……大丈夫

だ。信じる。魔道士になれるって。

あたしは、毎年魔術試験に行ってるよ。アンタが来る時を楽しみにしてるさ。待ってるからね

「……………アシエル……………」

悲しげな声が、エルの部屋に響いた。

07 魔力が消えた？（後書き）

キャラが多くなる確立大です。

08 巻き込んでしまった罪悪感

「違う!!」

エルの厳しい声がその部屋に響く。

エルと向かい側に座っていたマナはビクツと震えて、泣きそうな顔でエルを見つめる。

ギロリツとエルに睨まれマナはうゝと声を漏らした。

それを、隅っこで見ていたレイルは思わず溜息を吐いた。

（エルは人に教えるとなると厳しいからな……）

自分も昔覚えがあるからこそ、何も口出しが出来ない。

エルとマナの間のテーブルには参考書がずらりと並んでいた。

「この麻薬は危険だから使うなと言われている。なら、この麻薬を見つけてしまったとしたらどうすればいい？ A：捨てる。 B：人に教える C：魔道士、剣士、又は教師に渡す。 D：こっそり隠して後で使う」

んな初級中の初級問題が魔術試験に出るわけないだろと思うレイルも、本気で聞いているわけじゃなく地道に行こうという作戦だと知っている。

溜息を吐きながらマナのノートを見ながら簡単な問題が載っている教科書を眺め言うエルにレイルは感心した。

にしても、此処までマナに基礎知識がないとは、二人は驚いた。

普通、これぐらいのものは家でも教えられる筈なのだ。

親は、子供のために有る程度の知識を教える。それが普通なのだ。

（マーシャは、随分と寂しい思いをしてきたのかもしれないな）

教科書を見ながら、横目でマナを見る。そこで目を見開いた。

「また間違っている！ 使うなといわれている麻薬を何故後で使う！？」

「え…違うの？」

「当たり前だ。 Aだと、捨てられたものが見つけられる場合がある。

Bだと……………」

厳しい目つきをして一から教え込むエルにレイルは息を吐いた。
（あんだけ怒鳴って、マナも可哀想に……………にしても、腹は痛まないのかな？）

エルは昨日、あんだけでかい傷を作つといて、軽い塗り薬しか塗っていないというのに、随分と元気だった。

結局昨日、安静にしていた方が良いと思い、マナには自分が勉強を教えてやった。

といっても基礎的知識は余りないから、アイテム調合的な知識だったが。

その頃、エルが何を考えたのかなんて自分には分からないけども……………
（にしても、昨日…一昨日だ。見にいつて正解だった）

二日前、たった一日で元気というか穏やかというか…兎に角、イメージが柔らかくなった。

学園に入る前のように。

何となく嬉しくなつて、夜ちょこつと様子を見に行ったら、行き成りエルの部屋が光つたのだ。

突然の事で呆然としたが、慌てて中に入ったら、其処には傷ついて倒れている親友の姿。

正直言つて、焦った。

幼い頃から親友で居た彼が、居なくなるんじゃないかと。

（ま、そんな心配無意味だったけど……………問題は、これからか）

魔力を失ったエルは、これからどうするのだろう。

……………もしも、魔術試験に出ないなんて言ったら。

（僕も、出るのをやめよう）

一緒に、魔道士になろうと約束した親友の為に。

「…何度言えば分かるんだ…」

「御免、なさい……………」

怒ったような表情だけど穏やかな表情で怒ったような呆れたような声で言えば

しょぼんと俯くマナが居て。
レイルは笑みを浮かべた。

「……………ん？」

今年の魔術試験の名簿に目を通していた女 アーシェ＝フレッシュ
ヤルは思わず声を漏らした。

エルフィール＝ブレイズ。見覚えのある名前。

その名を指でなぞり、個人情報載っている欄へと目を移す

エルフィール＝ブレイズ

性別 男 年齢 14

フローン学年 中学年二年

成績優秀。魔力は中レベル

その欄を見て、苦笑した。

「やっと来たのか。意外と、早かったね」

フツと、微笑むと席から立ち上がった。

その場を離れたアーシェは、とても嬉しそうな笑みを浮かべていた。

「どういうことだデメエー！」

キツと自分の上官を睨み胸倉を掴み上げるジンに上官である女は金色の髪を揺らして微笑んだ。

「何のことだか、私には分からぬな」

「んだと！？エルシェールとか何とかいう奴に喧嘩売ってきたんだろ！？あれは俺の獲物だ！」

「…ふっ、そんな事か。…貴様が、何時までも仕事を終わらせないからだ。恨むなら貴様の愚かさを恨め。」

「なっ……………」

「……さてと、今日はまだ授業があつたな。任務をするつもりがないのなら大人しくしているよ。」

そう言つて、去つていく女を横目で見て、ガンツと壁に拳をぶつける。

「……あれは、俺たち黒龍神と…マーシャの問題だつたのにな…」
くつと辛そうに息を吐くと、天上を睨んだ。

「……………会いに、行くか。」

謝罪と、詫びに。そう呟き、立ち上がる。

アジトから出て暫く歩き、溜息を吐く。

「…なんで、こうなつたかなあ」

ぼんやりと呟く。その言葉には悲しみを込めて。

「どうしたんだ？」

「うつつわああああああ!!」

ガツンッ

後ろから声が聞こえ驚いたジンはガンツとその辺の壁に頭をぶつけた。

「いてててててて……………」

「…何してる？」

「…っってお前かアーシェ!!」

キツと相手を睨みつけるジンにははつとアーシェは笑う。

「何しに来た!？」

「うるさいなあ。礼言つて欲しいぐらいなのに。わざわざあたしが大ッ嫌いな黒龍神にあんたの為に顔出しに来てやったんだよ?感謝しようよそこは」

「だまれ。頼んでねえ。で?用件は？」

「いやー、何か嬉しい気分で歩いてたらアンタを見つけたもんでひよっこりと顔出して見たり」

「さっきの言葉は何処言つた!？」

ケラケラと笑うアーシェに、先ほどとは違い、嬉しそうに溜息を吐いた。

「それはそうと、何処行くんだ？」

「いや、……俺と、マーシャの件でな」

「……ふう、まだ大変そうだね。あたしも手伝う？」

「いや、今回は部外者……っていうと何か響きが悪いが、マーシャの近くに居た魔術剣士らしき奴に用があつてな」

その言葉になーんだとアーシェは蒼い髪を靡かせた。

ギロリツと思わず睨む。なーんだとは何だと言いつ返そうとしたが、此処で言い返すとややこしくなるので言わない。

「俺の事情知ってるくせに」

「知ってるさ。あんたがただの戦闘馬鹿だつて」

「ちげえ……魔術試験に出る奴らしいんだが、魔力をなくす薬を俺の上官である糞婆に飲まされたようだな、ようはみ・ま・いだー！」

「へえ、随分と優しい心の持ち主だったんだなあ。ジンは。」

ジンは優しい。

戦闘が好きだけれども、ちゃんと人のことを考えててくれて

自分と、マーシャのことで、関係ない奴を巻き込んでしまったから罪悪感を感じて居るんだ。

長年の付き合いであるアーシェはふうと息を吐いた

「……にしても、そんな薬を持っていたとはアイツには驚かされる。

……で？ソイツの名前は？」

「……え、エルシェーク？」

名前を問われ一瞬混乱した。

そつえば一昨日二回ほど名前を否定された。んでもって結局しつかりとした名前は覚えていなかった。

思わず苦笑する。

アーシェは自分の知っている響きを持っている名前に思わず首を傾げた。

（アイツじゃ……ないよね。）

「そう。ま、用があつたら言つてよ。適当に手伝つてやるから。」

「…有難うよ」

未だに、この親友は分からない。

だが、自分を心配してくれているのであろうアイシエにそつと笑みを浮かべた。

08 巻き込んでしまった罪悪感（後書き）

ジンは優しい人物です。

最初の方と性格が違うように感じるのもそのとおりです。

あのままの口調だとやりにくいので男らしく。（エ）

「今日は此処まで。後は部屋に戻って自習。何か分からない事があったら参考書を貸すから読む事だ」

エルの言葉にマナは魂が抜けたように倒れた。レイルはとつくのとうに帰っている。

参考書を数冊持てば、「僕も自習してくる。また明日ね」と言っただけで帰ってしまった。

明日は学園の授業があるから午前中は出来ないといえば、マナは物凄く残念そうな顔をした。

これだけ自分に厳しくされてるのに（自覚は一応ある）、マナは嬉しそうで、今の顔を見て思わず首を傾げた。

それを見ると、マナはニコツと微笑んだ

「だって、エルの授業すっごい分かりやすいんだもん。教え方が上手！厳しくてもちゃんと理解できるから！！」

そついう彼女にほっと息を吐いた。

最も、今日教えてきた殆どのものが初級中の初級問題。つまり、テストには殆ど出ないと予想される。

この先はまだまだ長い。先を考えると頭痛がしてきた。

そして立ち上がれば、棚から数冊持ってきて、座り込むマナの前に立ち

「……まあ、何とかなるだろう」

気休め程度にしかならない気もしたが、マナの頭を撫でてやる。

そして、参考書を机に置こうとした。

ドクンッ……

「うん！有難う！！じゃ、私はコレ借りてもど……エル！？」

戻る、そう言おうとしたマナの表情が驚きで染まる。

エルが自分の方に倒れてきた。

膝から崩れ落ちるエルをマナは慌てて受け止めた。

(…お、男の人ってこんなに重かったの!?)

と驚くものの、取り合えず行き成り倒れてきたせいか、足が不自然な方向いていて辛そうな姿勢なので、慌てて楽な様に姿勢を変える。

「エル、大丈夫…?」

声をかけるものの、姿勢を楽しにしたのにエルの表情は辛そうに見える。

ハッ……ハッ……と、不自然な呼吸が聞こえる。

それと同時に、マナの顔は青ざめる。

何度も、何度もエルを揺さぶった。

「エル、エル…エル!!」

聞こえるのは、不自然な呼吸だけ。

「れば……レイル……」

一番良いのは、レイルのところに連れて行くこと。

それでも、自分にエルを運ぶことは出来ないし、けれどもエルを置いてレイルのところに行く事も出来ない。

エルの症状はどう見ても毒としか思えない。

毒……毒に、効く魔術……

「……わから、ない」

何でこんな時に自分の力を使えないのかと歯を食いしばる。

エルの顔色は悪くなるばかり。

……そんなに、ヤバイ毒なの…?

ドンドンッ

扉が叩かれた。

マナはぱつと顔を上げる。もしかしたら、もしかしたらレイルかもしれない

そんな淡い期待を込めて、扉を開いた。
でも、其処に居たのはレイルではなく

「……じ、ジンっ」

何でこんな時に此処に来るのかこの男は。思わず腰にある短剣を引き抜こうとする。

エルを狙いに来たのだろうか。この状態のエルを。なら、自分は護らなくちゃ行けない。

けれども、マナの思考とは別にジンは少し焦ったような表情をしていた。

「エルなんとかは!？」

「…え？」

「エルフェイル…じゃなくて、えーっと、えーとえとえと…あーわかんねえ!! 兎に角エルの野朗の症状はどうだ!？」

戦いに来たんじゃないのかと短剣に込めた力を抜く。

それと同時に、エルの症状の事を聞かれ泣きそうになる。

この人で良い。

この人に頼れば良い。

頭のどこかでそういつていて思わずジンに抱きついた。

「エルがっ……エルが……っ」

気を許せば涙が溢れそうでその状態のまま、ジンにエルを助けてって呟いた。

ハアッ…とジンが息を吐くのが分かる

「当たり前だ。俺はそのために来たからな……エルは何処だ？」

「……其処」

「うし。」

そういえば、ジンはずかずかと入ってきて、エルの頬をペチペチと叩く。

それでも特に反応がないエルにジンは唸った。

「…大丈夫、だよな？」

「ああ。ギリギリツてトコだ。たくつ、あの野朗。剣に毒なんか塗りやがって」

あの野朗というのは、勿論ジンの上官だ。

それにマナはえと小さく呟く

「…聞いてないのか？」

「……………なに、を？」

エルの頬を軽く叩いた後、懷から飲み薬を取り出した。

キュポンツと音を立てて蓋を取れば、口元に持つて行き、流し込む。エルは寝たままだったが、呼吸の不自然な状態だったからこそ、少しずつ飲み込んで行った。

それを見ながらジンはポツリツと話す。

「俺の上官……………グランヴェイルって奴が居るんだ。ファミリーネームか、ファーストネームか知らんが。…ソイツが、お前を殺すのにエルは邪魔な存在だと、判断してな。昨日、一昨日か。エルの部屋に忍び込んで殺そうとしたんだ。」

たく、行動が早い上官だぜ。と呟きながら、エルの様子を見守る。これで、調子がよくならなければどうしようもないのだ。

マナは、ジンの言葉に硬直した。

自分のせいで、今エルはこうなっている。

それを知ると、どうしようもない罪悪感に襲われた。

それを見て、ジンはふうつと息を吐く

（この話でこれか……………なら、魔力が無くなった話はしない方が良さだろうな）

「…帰れ。後は俺がやっつく」

「え、でも……………」

「良いから。」

そう言った時のジンが、酷く懐かしく思えたのは気のせいだろうか。

「……………でも、」

「これは、俺の責任でもあるしな？俺が何とかしとくから」
それに素直に頷いた。

此処で、頷かなければエルの隣に居られたのに。

「……………ジンの印象変わった……………」

「そりゃな。今日は仕事モードOFFだし。……………ONの時に俺に会わないほうが良いと思うけどネエ？」

「……………」

ジンの語尾が「ねえ」で着いた時は仕事モードONだと判断したマナ。

ジンがちよつと分かりやすい人だと思ったのは此処だけの話だ。

ガチャンッ

扉が閉められたと同時に、ジンはフウツと息を吐いてエルを見た。

「おら、とつくのとうに起きてんだろ？」

「……………ああ」

小さく呟くと、頭を抑えながら起き上がったエルにジンはほつと息を吐く。

「……………教えないでくれたこと、感謝する。ジン……」

「どーも。エルシエール」

「違う」

そう言ったエルの表情は複雑な表情で、それでも穏やかで

エルの目の前に居るジンも複雑な表情で、それでも穏やかだった

「毒もあるとは思ってなかっただろ？」

「……当たり前だ。此処まで効くのが遅い毒なんてはじめてだ」

「俺も……。効くのが遅いぶん、効果は抜群だとさ。てか一日以上経つても効かなかったとは、お前どれだけ魔力に愛されてんだよ」

その言葉にさあなと軽い笑みを浮かべた。

やはり、ジンという人物はそこまで悪い人物ではなさそうだ。

……だが、やはりこの者も並以上の魔力は持っているのだろう

「……魔力も昨日よりは戻っている感覚がする」

「……………うっそー」

「いや、本当だ。……………100分の一って所だろう」

「駄目じゃん」

「……………魔術試験には間に合わんな。」

「平然と言ってられることかよ」

その言葉に苦笑する。

その通りだが、今焦っても意味がないのだろう。

今、自分が出る事は……

「今、私はマーシャを、魔術試験に受からせる事しか出来ないんだ」

「……そうかよ。ま、一応薬は探しくぜ。エルフィース」

「だから違う。……楽しみにしておこう」

「おうよ」

そう言つて、ジンは立ち上がった。

エルは、先ほどの疑問を口にした。

「……所で、最初会った時と口調が違う気がするのだが」

「あ、それ。仕事モード」

……どうやら、マナの判断はあっていたようだ。

09 毒（後書き）

ジンは人の名前を覚えるのが苦手です。

ジンの性格は最初とそのままなのですが最初にあの口調にしたのが失敗だったりします。

なるべく口調が被らないようにしたかったのですが無理でした。

10 図書館にて

次の日、朝一でコンコンツと扉が鳴った。

顔色がよくなり、学園の制服を身に纏ったエルはフウツと息を吐いて読んでいた本をベツトに置いた。

「開いている」

その言葉に反応し、ガチャリツと扉が開いた。

其処に居たのは、エルが予想していた通りの人物だった。

桜色の髪を靡かせてきたマナを、エルの蒼い瞳が捕らえた。

瞳に涙を潤ませているマナに苦笑すれば手招きをした。

それを見ると近づき、抱きついた。

「エル…エルウ……御免、なさい」

ほろほろと泣くマナの背をそつと撫でる。

バレないようにしたかったが、毒が有ったとはエルには予想外で

心配をかけてしまったようだ、そつと微笑んだ。

「私は、無事だろう？」

「…ん……うん!!」

それでも泣くマナに苦笑する。

「マーシャ、すまないが、これから私は学園の方に行かなければならないのでな」

そういうと、マナは渋々離れた。

目に涙を溜めて。

「合鍵を渡しておくからな。ちゃんと戸締りには気をつけろ。」

「分かったあゝ………いつて、らっしやい」

そう言うマナにふうつと頭を撫でる。

「いつてくる」

そついい、鞆を手にして部屋から出て行った。

「…………エル…………」

何か、彼は抱えている気がした。
それが、何だか分らないけれども。

魔術試験まで、二十一日。

「………どんだけ燃えてるんだよ」

「黙つとけ。マーシャには一から教える以外に教えようが無いんだ！」

珍しく眼鏡をしているエルにレイルの顔は引きつった。

手に持っている参考書から見てマナの為のものだというのは分かっていたが、問題は眼鏡だった。彼が眼鏡をする時は何時になく真剣な時であり、魔術関係が関わっている時。
思わず溜息を吐いた。

エルとレイルが居るのは学園内にある図書館だった。

魔術試験の為にある図書館内に、物語という名の本は殆ど無い。つまり殆どが参考書なのだ。

其処にレイルが足を運ぶのは滅多に無いことだった。

レイルの手にはエルから借りた参考書数冊。

「れ、レイラシエル様…あ、あの…」

「ん？」

後ろから聞こえてきた女性生徒の方へとくるりつと振り向いたレイルの顔は一気に青ざめた。

女性生徒が大勢居た。エルは来たかと参考書に目を通しつつ呆れた溜息を吐いた。

レイルは学園内でも美形という部類に入り、女性に追われる事は学園に入る前からエルは知って居た。

最も、自分自身が美形の部類に入るとは知らないようだが。

エルが下がってきた眼鏡を上げると、辺りから悲鳴にも似た声が聞こえたような気もした。

一方、レイルはその頃、女性生徒の山に引き摺られていた。

そんなレイルの状況も知らないでエルは参考書を読んで居た頃……

「隣、座るわ」

声が聞こえ、ふと顔を上げた。

其処には金色の髪を靡かせた女が居た。

手には、薬毒系の本を持って。

「座るわよ？」

改めて確認される。ふと、その顔に見覚えがあるような気もしたが。

「……構わん」

そういえば女はニコリツと微笑んで隣に座った。

それから数分後、またしても声がかけられた。

「エルファイル、でしょ？」

自分の名前を言われ横目で女を見ながらああと小さく呟く。

それにやっぱりと、分かっていたように微笑みながら言う。

それから色々と言がかけられる。

「歳、同い年よね？」

「剣術大会は見せてもらったわ」

「一度その剣術見せてもらいたいわね」

「いい加減ちゃんと話せやゴルア」

色々言がかけられるものの、エルにとってその女は興味対象外なので

「ああ」か「知らん」で返していた。

興味の無いものには無感情。それがエルだった。

「……ふう、秋炎の森に大穴の話、あたし犯人知ってるわよ」

その言葉にやっと、エルは顔を上げた。

秋炎の森の大穴の話は、教師も困っているようだと言っていた。

「私も知っている」

「……えー」

犯人など、エルにとって一人しか思いつかなかった。

『森に穴を開けたのはマーシャだろう?』

『え、何で……』

『マーシャの魔力の大きさで分かった。』

『うー、凄いな、エルは。……んー、魔力暴走させちゃってさ』

あの時の表情は、恐いというの表情だった。

魔力を暴走させたのだろう。…きっと、自分の力の大きさを始めて知ったのだろう。

目を閉じて、思い出すように言った彼女の手は、微かに震えていた。

「……あれが、きっかけかもしれんな」

私と、マーシャがあったきっかけは。

「ちよつとー、あたしはスルー?」

再び息を吐く。それと同時に、チャイムが鳴った。

ハアツと息を吐いた女は、本を一冊持って図書館から出て行った

…かと、思えばヒヨイツと顔を出してきた

「あたしリフェイル!! 宜しく無愛想なお坊ちゃん!!」

そついわれ微かに顔が引きつる。

無愛想で悪かったなと本を投げようかとも思った。

「たくつ…なんで生きてるのよ」

あの毒の中和薬なんて、黒龍神にしかないというのに。

自分でアレンジした毒薬の中和なんて、ただの魔術では出来ない筈。

黒龍神であたしを裏切る奴なんて居ない筈。

そう、ジンでさえも裏切らない筈なのに。

ジンが、黒龍神を裏切るという時は、マーシャを他の奴等の手で殺された時か

アーシェに関わる時。

自分の獲物に手を出された時も、怒るが決してあたし達を裏切ることはない。…筈。

ジンはマーシャとアーシェに關すること以外は無感情だし。

…なら、やはり自分で中和したというのか。

「中々やるわね。エルフィール」ブレイズ」

この黒龍神を敵に回したこと、後悔させてみせる。

10 図書館にて（後書き）

ネタバレっぽくないネタバレ？（普通にアトガキと言え）

分かったと思いますがリフェイルはジンの上官です。

一話で出してから”リフェイル”としては動いてなかったなーと思います。

リフェイル…目茶苦茶勘違いしてますね。

でもそれだけ、ジンを信頼しているというか理解しているようなのです。

あくまで”よう”ですよ？

アーシエは全てを理解していますが、リフェイルは仕事の時の顔しか知らないのです。

と、では軽く説明したところで失礼します。

11 迷子？（前書き）

短いです……

11 迷子？

学園の終わりを告げるチャイムが鳴り響き、生徒は全員、寮や家に帰る頃になる。

普段なら友人と喫茶店に行く者も居るが、試験が近い今の時期では、真っ直ぐ家に帰る事が多い。

その日、エルは真っ直ぐ帰らなかった。

片手にフローン学園のバッチがついた鞆を持ち、もう片方の手には住所と地図が書いてある紙を持って目的地へと歩き始める。

夕方だからだろうか、街中には主婦らしき人がその辺を歩いているのが良く目に付くのが分かる。人が多く呆れたように腕の時計を眺めると、針は五時を指していてまた息を吐いた。

広い、広い街の中を歩きながら、光風でも彼にかけておけばよかったかと今更思った。

光風…レベルは小中で仲間にかける魔術。仲間の場所が分かったりして便利なのだが、相手にかけわすれていたのだ。

「…何故其処まで頭が回らなかったのだ。…」

溜息を吐いても決して目的地に着くわけじゃなく仕方なく道を歩く。マーシャに何も言わずに来たのは悪かったかもしれないが、まあレイルが居る…ということで、マーシャには帰ってから謝れば良いだろう。

取り合えずこの場合は早く目的地へと着かなければ行かなかった。でないとい日が暮れてしまう。

何故目的的地はこんなに遠いのか…というより何故こんなにこの街は広い。苛々する。

「一体何処にあるんだ!!」

大声で叫べば、地図の場所へと走り出すのだった。

エルは、自分が方向音痴ということを確認する気は無かったりする。未だに誰にも知られていないものを誰かに知られる気は無かった。

この街でちゃんと道が分かるところと言えば、学園内と寮だけだったりするのだが。

その地図を逆さまに握られていることにまだ、エルは気付かない。

『エルウェース街14-6』

自分の目の前にはこう書かれた一件の家。エルはガクリツと肩を落とした。

それっぽいのを当たりはじめ十四件目。未だに目的地には着かない。目の前に書いてある住所と自分の紙に書いてある住所を見て再びガクリツと肩を落とす。

『エルウェール街14-8』

これが、エルの行きたい場所。

この国は似たような住所が多すぎて嫌いだ。とレイルの実家に行く時もあった気がするのだ。

な、情け無い……

辺りは真っ暗になりつつあり明日に回すかと肩を落として歩く。

アイツの家は一体何処に有るんだ……

「……ミルフィーユ、遅い。遅すぎるぞデメエ……」

声が聞こえ思いつきりブンとか大きな効果音が鳴りそう勢いで振り向いた。

其処には自分の探していた人物。思わず顔が明るくなる。

本人無自覚だが。

「最初と最後が違う。何故菓子の名になる……すまない。少々やることがあつて送れてな」

嘘だ。だが、本当の事を言う気にはなれなかった。

ふうんと余り信じてなさそうな声で言うと、手招きをされた。

「…所で、貴様の家はこの辺りじゃないのか？」

「お前が余りにも遅いから俺がわざわざ出迎えてやったんだろっがよ……!」

睨まれた。

……十四件もみながらさ迷っていたからな。

「…思うがこの辺りは家が多すぎる。」

「当たり前だ。この辺りは住宅地だからな」

「……………」

そうですかと何処か遠くを見つめながら内心呟く。

（もうちよつとしつかり地図を見れるようになれば良いのだが）

少しは地図を見る努力でもしよう。

心にそう誓ったエルだった。

11 迷子？（後書き）

エルは方向音痴なのです。

12 薬草（前書き）

また短いです。

12 薬草

ジンに連れられた先には、家。普通の二階建てだった。

「…入って良いのか？」

「勝手に入れ。」

自分の疑問にコクリツと頷くと、遠慮無く中へと入る。

リビングへと着くと、鞆を隣に置き、座る。

ジンは飲み物を取ってくると言ってキッチンの方へと行ってしまった。

改めて回りを見渡す。

必要最低限の生活用品。さっぱりとした家だった。

精々多いというものは、武器。

壁に立てかけてあったり、棚に弓があったりといろんな場所に武器があった。

「ほらよ。…ってお前何してんだ」

思わず、弓を手にとっていた自分に呆れた顔をするジン。

苦笑して、弓を棚に置いた。

お茶が入ったコップをほらよとテーブルに置かれ少しだけ飲み込む。

「仕事場を見てきたら、一応あったぜ。」

「本当か…？」

「ああ。だが、護りが嚴重でな、取りに行くのは無理っぽい」

やはり無理かと、目を閉じる。

そして、ジンの次の言葉を待った。

「だが、一つだけ方法があつてな」

その言葉に閉じた目を開くと、ニイツと笑ったジンがいた。

「魔術試験まで後二十一日。俺の知り合いに、毒薬だか何だかの調合が上手い奴が居てな。頼んで見た。そう簡単に手に入らない材料が多いのか、何とか二十日で完成だよ」

その言葉に小さく息を吐く。

間に合う………？

「そのためにお前から学園で手に入れてきて欲しい物があるそうだが、これメモな」

そう言っただけ渡されたメモをまじまじと見つめる。

どれもこれも、学園で軽く手に入れられるものだ。

学園では、魔術試験に向けて薬草や、道具などを頼めば幾らでももらえる。

それを利用したのか、少し手に入れるには難易度のものも書いてある。

アイテム調合テストは、低くても平気だが高ければ高いほど、魔道士の評価も高い。

だからこそ、実戦よりもこつちを優先する生徒も多いからか、広い範囲で用意されている。

「…出来るな？」

ジンの言葉にこっくりと頷く。

「ああ、出来る。明日には揃えられるだろう」

「なら、地図を渡すから此処に行け」

そういつて渡された複雑な地図を見つめ、大きな溜息を吐いた。

また、地図を見て迷って、しかも顔すら知らない人物に薬草を届けにいかねばいけないと考えると気分が重くなった。

その様子を見てぶつとジンは笑った。

12 薬草（後書き）

此処で区切りたかったために字数が少ないです。
もしかしたら修正するかもしれませんが

13 喧嘩らしきものと勉強と

帰るなり怒られた。

……………何故だ？

「エルの馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿あああ！！遅すぎるよお……」

「初級問題の半分しか分からぬ奴に馬鹿とは言われたくない。」
鞆を部屋に置けば、馬鹿と連呼するマーシャに溜息を吐く。
自分が居ない間に何かあったのだろうか。目に涙を潤ませているマーシャに首を傾げる。

「うう……………もうエルなんかしらなああい！！」
ダンツと扉を強く閉めた五秒後にはダンツと隣から扉を開ける音が聞こえてきて、更にその隣からうるせえと多分学園の生徒であろう人物の声が聞こえてきて。

自分には何があったのかさっぱりで首を傾げるしかなかった。
疑問はまあ多すぎるわけで。

行き成り馬鹿と言われてしらないと言われて、意味が分からなく更にマーシャは泣いていたようだったので、更に分からなく取り合えずテーブルに置いてあったノートに視線を移した。

「……………」

小さく声を漏らす。

昨日教えたことをまとめてあって、更に参考書に目を通した内容を分かりやすくて正確に書いてあった。

次のページにはレイルに教えてもらったのかアイテム調合に必要な道具など簡単な知識も書いてあった。

今日中にまとめたのだろうか、と小さく笑みを漏らした。

……しつかりやったぞと褒めて欲しかったのだろうか？

「だったら子供だな」

開いてる片手で口元に手をやり小さく声を漏らしながら笑う。

そして、そのページの隅に書かれた文字に目を見開く。

『エルは、ジンのところ言ったみたいだけど……無事、で居るかなあ……？』

自分は彼女を心配させていたのだと、思った。

そういえば、レイルに行き先を教えておいた気がする。

「……心配させていたのか」

なら言ってくれば良いもののと、制服から普段着へと着替える。

着替え終わると、簡単な夕食の準備をしてからマーシャのところに向かうために、扉へと手をかけ、押した。

『エルならじ、ジンとか言う奴の所に行ったってさ』

エルの代わりに来たレイルの言葉を聞いて、思わずレイルに魔術を放つところだった。

何でジンのところに言ったのかは、自分には分からなかったけどとても心配だった。

昨日の事があるからそこまでジンに敵意は無いけれども危ないかもと思った。

ジンは敵なのに、エルはそれを知らないかのように行って……

大丈夫だと言いつ聞かせてもエルは遅いし……

「なのに、平然と帰って来るんだもん……」

心配する必要は無いって思ってた。だって彼は強いから。

それでも心配してたのに。これだけ心配してた自分が馬鹿に思えてきた。

きゅつと枕を抱きしめる。

小さく息を吐いた。

「……エル、怒ったかなあ。」

小さく呟いても此処にエルは居ないわけで。

決めたと立ち上がり、エルに用意された部屋から出て行く。

廊下へと出ると、先ほども思いつきり閉めた隣の扉に手をかけた。

力を軽く込めて扉を引く前に

ガチャンッ バシンッ

扉は自分の顔に当たった。

……地味に、痛い。

「悪かった。……まさか、居たとは思わなく。」

扉を押すと同時に何かにぶつかる音がした。

まさかと思い、見てみると、其処には両手で顔を押さえたマーシャが居た。

慌てて中に引き入れ少し赤くなった額へと、氷の詰まった袋を当てる。

「……私も……悪かったし。」

ぎこちなく言うマーシャを見て思いつきり溜息を吐く。

自分の大きな溜息を聞くと、マーシャは俯いた。

片手で軽く頭をかくと、思い出したように言ってやる。

「ノート、自分でまとめたんだな。」

「え、……あ、うん」

「上出来だ。」

「ほっ本当に!!?」

その言葉に顔の痛さも忘れて立ち上がるマーシャにクスクスと笑う。
どうやら褒めて欲しかったのは確かのような。

自分の行動に顔を少し赤く染めてからストンツと座ったマーシャの頭を撫でる。

「まあ……明後日ぐらいには中級にいけるかもな」

「やった!!」

思いつきり微笑むマーシャを見てふうっと額に手をつく。

「但し、明日の問題を半分以上合格すれば、だがな」

その言葉に今度はガクリツとうなだれる。

「まあ明後日は用が有るからレイルに頼むが」

「えええー」

コロコロと表情を変えるマーシャにふっと笑みを作る。

「ま、今は夕食だな」

「やった！」

笑顔で笑うマーシャの頭をそつと撫でると、用意を始めてある夕食を作り出すのだった。

この後、マーシャに今日の分！と徹夜で勉強を教える嵌めになることはまだエルは知らない。

14 久しぶりに呼ばれる名

次の日 必要な薬草を一通り集めた所でジンからもらった簡単な薬のメモを見ながら薬を作った。

協力的な薬は時間がかかるだけあって完全に治せるが、今エルが四種類ぐらいの薬草で作った薬は一時的に魔力を回復するもの。しかも力の半分も出せない。

それでも授業に困るわけじゃないので片手に薬草の詰まった袋を持ち教室へと戻った。

鞆に詰め込むと、名前も知らないクラスメートに呼ばれ振り返る。

「ブレイズ」

自分の姓を呼ぶクラスメートの後ろにはごつい男達が数人……一発で何の用だか分かった。

その男達が身に纏っているのは高等部の制服だった。それぞれの腰には剣がある。

高等部の剣術部の者と魔術部の者が半々……というところだろう。

この学園に高等部の者は中等部の1/4ぐらいの人数が居る。そしてその殆どが何度も自分に喧嘩を売ってくる人物達だったので見覚えがあった。

高等部の者は、魔術試験に落ちた者と剣武試験で落ちた者。それ以外に居るとしたら自らが高等部であることを望んだもの。まあめつたに居ないが。

だからこそ、中等部の者に八つ当たりする者が多い。

特に自分が狙われてたりするのだが、まあ問題ないだろう。

自分で言うのは何だがこの辺のごろつきなどに負けるつもりはないしせめて剣の腕やら魔術の腕を磨いてからこいといいたくなる。

ついでに、中等部の年齢を満たしていない者や仮入学でこの学園に通う外等部というものがある。まあ簡単に言えば正式に入学していないものが入る所で。

そこはまったくよそ者扱いなので高等部の者にボコボコにされる場合が多いらしい。

というわけで外等部に入るものはたった数人しか居ない。

問答無用で教室だというのに剣を抜く高等部の連中に周りの奴等はささささっと逃げる。

その殆どの者がエルに感謝を向けている。

……エルが居るおかげで高等部の者はまったく他のものに喧嘩を売ろうとしない。

だからこそ、他の者は知らぬ顔をしながらもエルを応援している者が多い。

エルは剣を抜いた相手を見下した目でふつと鼻で笑う。

「火龍弾」

それをまともに食らった高等部の者は3メートルくらいふつとんだ。それでもかすり傷数箇所ぐらいな所はさすがというべきかと内心思う。

教室で揉め事を起こすのはよくないと思いつくの窓に手をかけるとひらりと飛んだ。

高等部の者は自殺行為かと誤解するが、このクラスの者はぼんやりとそれを見つめてる。

それと同時に、チャイムが鳴った。

内心エルはしまったと思うもののこの授業はサボろうと決める。

高等部は何年もあるが、中等部は6年しかない。其の間に魔術試験に受かれなければ高等部になる。

高等部の者は中等部の者に与えられる魔術試験を6回落ちているだけあって授業熱心だ。

ということ自分で自分を追ってくるものは一人も居ない計算になるわけで中庭に座りこんだ。

（使えた……）

レベル1か2（小）は昨日ジンにもらった薬を飲んで試してみたがレベル3、4、5（中）は試さなかった。だからこそ先ほど高等部の者が3メートル吹っ飛んだのもエルが驚いていたぐらいだ。

だが魔術試験は自分の持つ力すべてを使わなくちゃいけないわけで試験管にもどれくらい力があるのかは相手の髪質を見れば分かったりする者も居る。

（……此処はジンのあてにしている人物にすべてかけるしかないかなんとしても受かりたかった。

「おやあ？ずいぶんと久しい顔が居るじゃない。久しぶりだね、エルシェフィア……いや、今はエルフィールだったっけね？」

ずいぶんと懐かしい元、自分の名で呼ばれはじかれたように上を見た。

目を、見開いた。

風で揺れる蒼い髪はとても懐かしくて、かつて自分の師であった彼女に泣きたくなった。

「……アシエル……」

なきそつな顔で言う元弟子を見ながらアシエルと呼ばれた女
アーシエはふっと笑みを作った。

「久しぶりだね。エルシェフィア」

彼女はもう一度、自分の本名を口にした。

14 久しぶりに呼ばれる名（後書き）

まず此処で一つ皆さんに謝罪を……

前回の更新からずいぶんと時間が空いてしまってもうしわけありませんでした。

本人はそれほど忙しくなかったのですがパソコンの調子が此処数日悪かった等といういろいろな事情がありまして。

まあこの話で作者 蓮希が思っていたよりすごい展開に移ってしまいました。

…予想してませんでしたね。はい。……何か御免なさい。

取り合えず話が続かなくなったら修正入ります（駄目じゃん）
魔術レベル

レベル1・2Ⅱ小

レベル3・4・5Ⅱ中

レベル6・7・8・9・Ⅱ高

レベル10以降Ⅱ最上級

細かく表示するところになります。（最初からそうしとけよ）

15 あたしとアンタの関係

「ようやく来たんだね……イズフォルト家の長男時期当主だった筈のエルシェフィア。」

「……………嫌味か」

「だって君なら去年でもこれた筈だし。それに外等部の時点で君は魔術試験に受けられた筈だ。そうだろう？」

「……行かなかったのは、自分の魔力に自信が無かったから……………だ。アシエル……………師」

「ふふっ、君があたしをそうやって呼ぶのも久しぶりだね？ま、会ったのが三年ぶりくらいだからそんなもんか」

「……………懐かしい、な」

エルシェフィア「ルア」「イズフォルト

それが、自分の本当の名だった。大事な母と父からもらった。大切な

イズフォルト家は元々王家の者であり、父親はその王に仕える暗殺部隊隊長だった。

代々イズフォルト家当主は武術の才に恵まれ必ず暗殺部隊隊長へと任命された。

だが、父は隊長に任命され数年後　私が四つの頃王に逆らい、私以外の一族は殺された。

優しく何時も微笑んでいた母も、暗殺部隊なんて受けていたのに厳しく、それでも優しくかった父と……………二つにもならない妹が殺された。

四歳だった私でも覚えているほど、あの時は衝撃的だったのだ。

『エル：良いわね？私の言うことをよく聞くのですよ？』

『母上…？』

『父上がこの日の為に作ってくださった隠し部屋があるのです。其処に私が良いというまで入っていないさい。分かりました？』

『父、上は？』

そのとき、私はわかつていたのかもしれない。此処で従ったら私人置いていかれるのではないのではないかと。

そんな不安を遮るように母上は私を抱きしめた。

『さあ、何か母上に願ひ事がありますか？』

その言葉に息を吸った。泣きそうな声で伝えた。

『笛を…笛を吹いてください。母上』

其の日、私の家族は全て居なくなつた。

『…母、上…？』

『でて…きて、かまいま…せん…よ……』

その声と共に飛び出した。目の前には血まみれの母と父と、妹。

『……怖かった、だろう…？』

そういつて笑みを作る父に私は素直に首を上下に振つた。怖かった。みんな居なくなつてしまふのではないかと。私だけ、置いて逝つてしまふのではないかと

そして、それは現実になつた。

『…此処を出たら、すぐに走つて………っ、街を、出なさいっ……でた、ら…人が、居るから。アシエ、ル…が……』

そう言つて、母上はもう息をしない幼き子を抱きしめた。

『いきな、さい。私達の…自慢………息子………よっ………わた、しと…』

…はは…うえの…分もっ！』

そう言つて父上は力なく地に伏した。

『おや、すみ……なさ……い。いとし……子……』

最期に力なく母上は、息をしていない妹と私を抱きしめていて……気付けば母上の体から力が抜けていた。

『はぁ……はぁ………っ』

何とか外へと来た私を待っていたのは、今まで見たことの無いような……自分は女性と言われたら所謂貴族の女性しか知らなく……貴族というよりも男性っぽい雰囲気を持つ女性。

『アンタがエルシェフィアだね？』

『………あ………アシェ………ル……？』

その言葉にアシエルは笑った。

『ハハッ、流石フィーリアとエイルの息子だ。……こんなときも泣かないなんて、凄い子だ。』

そう言つて、私を抱きしめたアシエル。

『泣けば、母上と父上が困ると思っただろう？』

その言葉に俯きながら小さく返事を返した。

アシエルはポンポンッと小さな私の身体を抱きしめながら片手で頭を撫でた。

『泣きな。もうアンタの母上も、父上も………困らないから。うんと、泣いていいよ』

ポロポロと泣きはじめた。

アシエルは、慰めることも何もしなくただずっと

私を抱きしめていた。

その日から私はエルシェフィアではなくエルフィールとなった。

「……アシエル。すまない……」

私の言葉にん？と首を傾げるアシエル。

私が魔道士になろうと決めたのは、私のこの魔力をコントロールする為。

私が、強かった父上に胸を張って報告できるように

私が………アシエル、に……魔道士として認めて欲しかったから。

「私は……魔道、士になれない」

その言葉に一泊置いてアシエルは笑い出した。

「ハハハハッ……やっぱり、ジンの言ったのは……アンタだったんだね？」

「ジンッ！？知っているのか！？」

「勿論。アイツとあたしは……まあ、戦友かな？アイツが黒龍神に入る時にはもう仲が良かったな。」

そして、笑いながら言った。

「アンタの持つてる薬草、あたしに渡しな？ジンの言ってる奴は、あたしだから。」

その言葉に眼を見開いた。

そして次のチャイムが鳴る頃に 私は走って薬草を取りに行った。

全ては、魔道士になる為に

15 あたしとアンタの関係（後書き）

前回の更新から時間が経ってすみませんでしたああ！（スライディング土下座ノ）

これからも頑張りますのでどうか見捨てないでください！

16 街での出会い

すきだったんだ。

「おにいちゃんー!!」

そういつてだきついたあたしにたいせつなおにいちゃんはわらった。

「……どうしたんだ？マーシャ」

そのあたたいかいこえにえへとほえんだ。

だいすきだったおにいちゃんはあのひ　おかあさんとおとうさんと
いっしょにころされたらしい

したいは、みてないけれど

「……お兄ちゃん」

そつと呟いて起きても大好きな人は居なくて、その代わりに暖かい
ものをくれる人が二人居て

エルとレイルは私の中では友人だと思っている。
会って一ヶ月もしないのに。

今日もエルは学校へといつてしまい、やることがなくなった私は街
に出た。

たった数日なのに久しぶりに感じる街。そう、エルと会ってから

ずっとあの場所に居たから。

ドンツと誰かにぶつかられた。振り返れば頭の悪そうな人たち……つて私の言うことじゃないか。

「あ？何だコイツ」

「コイツァ…… グランヴェイル様から言われてた奴じゃねえか？」
その言葉にびくりっと身体を震わせる。… グラン、ヴェイル。エルを傷つけた、人。

ジンの、上司……… 黒龍神だ。多分。

此処は逃げようと一歩下がった途端に地から足が離れて首元に圧迫感。

目の前には、男達。二人居るうちのひとりの短い手は私の首を掴んでいた。

周りの人々は気付いているのだろう。それでも恐ろしいのか、かわらないほうが良いと踏んでいるのか誰も近づいてこない。

キリキリツと目の前の男はナニが楽しいのか笑って自分の首を掴む手に力を込めた。

「か…… はっ………」

息が詰まる。苦しい。苦しい……

「殺しちゃってかまわねえよな？」

「そりゃな。ジンの奴が何時までも殺さねえし」

そう言つて更に力を強めた男。目の前がかすんできた。息が、できない。

魔術を使おうにも集中できなくて魔力が集まらない。エル、エルエルエル……ッエル！！

きゅっ と硬く眼を瞑った。

此処に、居るはずが無いのに。彼を求めてしまった。

「ねえ、アンタ達。あたしの話を聞いてくれないかい？」

声が、聞こえた。上手く頭が働かない。ただ、男の手が緩んで少し息ができるようになった。

上手く見えない眼で一生懸命、声の相手を探す。周りの人々は逃げたのか人が私と男二人しか居ない中で、上手く見えない眼はその人を捕らえた。

エルの眼と同じような 蒼い、髪。

荒い息を整えて片目を閉じて片目だけでその人を見る。

私と眼があつと、その人は微笑んだ。男の意識がその人へと向いた途端私は男から離れて地を蹴った。そしてだいぶ離れたところでまた息を整えた。男は一瞬だけしまったという顔をした。

「話だあ？」

「はっはっは。何だあ？コイツの命を助けてお前の命をくれるのか

？」

馬鹿にしたような声を出した二人にふふつとその人は笑う。

「その子を殺さないっていうならあたしもアンタ達を殺さない。その子を殺すっていうなら殺させる前にあたしが殺す。良い話だろう？」

ニヤツと笑ったその人が、自分には天使みたいに見えた。
護ってくれている　？私を。

男達は急に真面目な顔になってそれぞれ腰の剣を抜いた。蒼い髪の女の人も腰から長剣を抜いた。

「はっ、女にやられたら男の立場がねえだろうが。」

「俺達が二人とも殺してやるぜ」

そう言つて、一人は私の方に…もう一人は女の人へと走っていった。私はとっさに呪文を唱えた。今の私に剣は無い。ならば作るだけっ！！

「瞬の黒　闇の短剣を　我が手にっ！！」

今唱えているものは光闇神の元となつた魔術の一つ。

もともとアレは三つの上級レベルの魔術を元に作られたのだ。

一つは光の短剣　光龍神^{こうりゆうしん}。もう一つは今唱えている闇の短剣　闇龍神^{あんりゅうしん}。そして最後の一つは　光と闇の魔法弾　龍光闇撃^{りゅうこうあんげき}。そしてこの三つをアレンジして作り変えたのが最強と呼ばれる魔術の一つ

光闇神だ。

今これを唱えた理由は三つ。武器が無かつたことと、上級魔術で相手をビビらすため。中級ぐらいなら相手のにじみ出る魔力で使えることが分かっているから。ならば上級だ。そしてもう一つはこの魔術を唱えるのに時間が掛からないということ。

相手の顔がゆがんだ。それと同じに私の右手に生まれた短剣を相手の胸へと突き刺した。

「ああああああ！！」

狂ったように叫ぶ男。返り血を少し浴びたが特にこれといったことはなかった。

エルがこの姿見たらどう思うかな……
そして女性の方へと視線を向けた。

「これでおしまいかい？」

そういった女性の足元に倒れる、もはや顔が血で分からなくなってしまう男。

強…と呟いた。女性は私に向かってニコリツと笑った。

「君がマーシャだね。此間エルフィールから聞いたよ。」

その名に私は内臓が飛び出るかつて程驚いた。びっくりしたあ……

「エルの知り合いですか？」

「アーシェ…フレシヤル。簡単にいえばエルの師かな？」

だからそんなに強いんだ…と納得した。

「マーシャ…レス…ルフィスウエナ。…マーシャか、マナでよろしくお願いします。」

そう言うとアーシェさんから右手を差し出され短剣を消した私はそっと右手でアーシェさんの手を握った。

アーシェさんの手は暖かった。

16 街での出会い（後書き）

前回の更新から時間がたって申し訳ないです……

学園が終わり、ジンに呼ばれていたエルはまた迷いつつもジンの家へ向かい其処でアシエルに出会い既に薬草を渡した後だと語る。

ジンはクスリ、と笑いよかつたなとエルに告げた。それを聞いて、そつとエルも微笑を作る。

「私には、どうもお前が敵だとは思えん」

「そりやな……俺のせいでお前が落ちたとか聞いたらそれこそ俺は立ち直れん」

「……そうか」

なんとなく、良い雰囲気の流れジンの淹れてくれた紅茶をそつと口に運ぶ。外見からして紅茶、という洒落たものは余りジンには似合わない、と思いつつもエルはその言葉を心に押し込んだ。

「エルフィール」

そのジンの言葉にエルは目を見開いて、紅い髪を揺らしてジンを見つめた。その視線に意味がわからなくなったジンは若干恥ずかしそうにエルから顔を背けた。

「何だよ!？」

「……お前に、初めて名を間違えられずに呼ばれた……」

心底驚いているようでジンは顔を引きつらせる。エルから見れば決して悪意はないのだが物凄く侮辱をされている気分になり思わず剣を抜くところだった。

「……うるせえな……気に入った奴は覚えようって決めてんだよ!」
その言葉にくつつ、と笑ったエルはおかしな奴だな。と呟いてからふと首を傾げる。

「なら、マーシャもか？」

ふとした疑問にジンはびく、と肩を震わせた。ジンの性格からして

殺す奴の名前などいちいち覚えなそうだ。そう思つて口にすればジンは固まって暫くエルがちよっかいかけても無表情のままだった。暫く黙つたまま紅茶を飲み込めば小さな息遣いが聞こえてきた。

「……ああ。気に入つてゐるの域を通り越してゐるぐらい、大切だ」

「……そうか」

どうして、等とは聞かないエルにそつとジンは笑みを作つた。込み入つた事は聞いてこなくそれがジンにとって凄くうれしい事であつてそつと小さく礼をいう。

「今度、殺し合いとは関係なく私と手合わせをしてくれないだろうか」

「ん、良いぜ。お前の魔力が戻つてからな」

二人で顔を見合わせにいつと笑つた。

そつと寮の扉を開く中にいたマーシャはあつ！と顔を明るくさせてとてとて、とエルの前へと歩いてきた。

「お帰りなさい！」

その笑顔にエルは苦笑気味にああ、と答えた。そして出迎えてくれたマーシャにはそれだけで気まずそうに部屋へと入つた。それに首を傾げつつもマーシャは後ろから続いていた。

鼻につく匂い。それにエルが眉を潜めればマーシャは引きつった表情で頭を下げる。

「ご、ごめんなさい……今日は、できると思つたの……」

何故か、料理が致命的。偶に成功することもあるが、エルが居ない時には作るなど約束をしてあつた筈なのだ（成功率が余りにも低すぎる）睨むようにマーシャを見ればマーシャは縮こまる。

溜息を吐いて、台所の片付けに入ればしゅんとしたままのマーシャ

がポツリと私に向かってつぶやいてきた。

「ねえ、エル……何か、隠している事、ない？」

その言葉に、肩が跳ねそうになった。エルは少しだけ眼を見開いてマーシャを見た。マーシャは俯いた顔をそっと上げて少し戸惑ったように顔を背けて言う。

「アーシエ、さんに会ったの。……それ、で。エルはまだアンタには言っていないのか？って聞いてきて、意味が分からなくて……もしかしたら、また私何かに巻き込んだんじゃないかって……」それに余計な事を、と小さくアーシエに向かって文句を言ったエルは安心させるようにマーシャの頭を撫でてまた台所の片付けに戻った。

「平気だ。マーシャ……お前に関するものでは特に隠した覚えがないからな」

そういえば、ぱあっと顔を明るくさせたマーシャがるん、という効果音が付きそうな勢いで片づけを手伝い始めた。

少しだけ、胸が痛んだのは気のせいではないだろう。

悪い言い方だが、マーシャに巻き込まれたのは確かなのだが。それをエルが素直に口にする程空気が読めない男ではなかった。

（言えば、絶対に泣く！）

妹のようなマーシャを泣かせては、死した母に顔向けが出来ん！とエルは小さく溜息を吐いて片づけを続行した。

17 嘘（後書き）

久しぶりの更新になります。かれこれ一年ですか、長いものです。えーと本格的にまた更新再開が出来ると思うのですがそれよりも先に前面書き直しをしたいなあとか密かに思っています。って事で18話更新はまだまだ遠いかと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8820d/>

魔道士

2010年10月16日02時33分発行